平成 20, 21 年度
中期目標の達成状況報告書
(別添資料)

平成 22 年 6 月
東京芸術大学

目 次

【不開示】資料 1-1-1 学生による授業評価結果(美術学部実技科目)	1
【不開示】資料 1-1-2 学生による授業評価結果(音楽学部個人レッスン)	1
【不開示】資料 1-1-3 学生による授業評価結果(大学院研究指導)	1
【不開示】資料 2-1-1 美術学部(美術研究科を含む)における教員相互評価結果 (デザイン科から一部抜粋)	2

留意事項

別添資料：資料・データ番号や資料・データ名を記入し、出典等を記載してください。また、記載されている資料・データの内容がいつの時点のものであるのか(アンケートの実施年度や競争的外部資金の採択年度等)を明記してください。

頁数の上限：別添資料の頁数の上限は、顕著な変化があった中期計画の数と、「改善を要する点」として指摘された事項の数との合計数としてください。

資料 1-1-1 学生による授業評価結果（美術学部実技科目）

No.	設問文	当学部 平均点	全体 平均点	上段:回答数 / 下段:回答率				
				5	4	3	2	1
1	あなたのこの授業への出席状況はどのくらいですか。	4.37	4.40	90%以上	89~70%	69~50%	49~30%	29%以下
				307	161	54	15	8
				56.3%	29.5%	9.9%	2.8%	1.5%
2	1年間を通じて、この授業に対するあなたの取り組み方を自己評価してください。	3.61	3.65	非常に良い	良い	普通	あまり良くない	良くない
				80	224	192	33	10
				14.8%	41.6%	35.6%	6.1%	1.9%
3	担当教員（教育研究助手も含む）と適切なコミュニケーションがとれていると思いますか。	3.27	3.34	強く思う	そう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	全くそう思わない
				74	141	221	70	36
				13.7%	26.0%	40.8%	12.9%	6.6%
4	制作中の各段階で担当教員からアドバイスや意見の提示はありましたか。	3.60	3.66	頻繁にあった	数回あった	2~3回あった	1回あった	ない
				120	221	117	45	44
				21.9%	40.4%	21.4%	8.2%	8.0%
5	この授業を受講することで、作品制作にあたっての知識や技術が習得できたと思いますか。	3.96	3.99	強く思う	そう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	全くそう思わない
				173	222	109	26	12
				31.9%	41.0%	20.1%	4.8%	2.2%
6	課題に対応した制作時間について、適切な配慮がなされていたと思いますか。	3.35	3.39	強く思う	そう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	全くそう思わない
				64	181	202	79	19
				11.7%	33.2%	37.1%	14.5%	3.5%
7	制作環境・設備について、どのように思いますか。	3.12	3.23	非常に良い	良い	普通	あまり良くない	全く良くない
				53	151	184	126	32
				9.7%	27.7%	33.7%	23.1%	5.9%
8	講評会で自らの意見を述べることができましたか。	3.34	3.39	十分できた	できた	どちらともいえない	あまりできなかった	全くできなかった
				50	208	183	88	16
				9.2%	38.2%	33.6%	16.1%	2.9%
9	講評会での教員からの意見は、自分にとって今後の制作の判断材料となるものでしたか。	3.87	3.91	強く思う	そう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	全くそう思わない
				123	276	116	21	12
				22.4%	50.4%	21.2%	3.8%	2.2%

資料 1-1-2 学生による授業評価結果（音楽学部個人レッスン）

No.	設問文	全体 平均点	上段:回答数 / 下段:回答率				
			5	4	3	2	1
1	自分の出席状況はよい。	4.52	強く思う	そう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	全くそう思わない
			240	115	19	6	3
			62.7%	30.0%	5.0%	1.6%	0.8%
2	自分はレッスン、練習（レッスンの準備）に意欲的に取り組んでいる。	4.31	強く思う	そう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	全くそう思わない
			169	168	40	3	2
			44.2%	44.0%	10.5%	0.8%	0.5%
3	質問や相談に対する教員の対応は適切である。	4.70	強く思う	そう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	全くそう思わない
			281	87	10	3	0
			73.8%	22.8%	2.6%	0.8%	0.0%
4	練習（レッスンの準備）についての教員の指導は適切である。	4.68	強く思う	そう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	全くそう思わない
			281	81	17	3	0
			73.6%	21.2%	4.5%	0.8%	0.0%
5	レッスンに対する教員の熱意を感じる。	4.69	強く思う	そう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	全くそう思わない
			296	65	15	5	2
			77.3%	17.0%	3.9%	1.3%	0.5%
6	音楽表現について理解できる説明である。	4.73	強く思う	そう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	全くそう思わない
			300	70	8	4	1
			78.3%	18.3%	2.1%	1.0%	0.3%
7	専門技術についての説明は十分に理解できる。	4.70	強く思う	そう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	全くそう思わない
			286	83	15	1	0
			74.3%	21.6%	3.9%	0.3%	0.0%
8	レッスンは所定の時間数・回数で行われている。	4.54	強く思う	そう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	全くそう思わない
			256	94	23	8	3
			66.7%	24.5%	6.0%	2.1%	0.8%
9	レッスンに満足している。	4.64	強く思う	そう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	全くそう思わない
			281	74	18	4	4
			73.8%	19.4%	4.7%	1.1%	1.1%

資料 1-1-3 学生による授業評価結果（大学院研究指導）

No.	設問文	全体 平均点	上段:回答数 / 下段:回答率				
			5	4	3	2	1
1	所属研究室の教員と適切なコミュニケーションがとれていると感じますか。	3.67	強く思う	そう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	全くそう思わない
			60	121	62	36	7
			21.0%	42.3%	21.7%	12.6%	2.4%
2	研究テーマを設定する上で、所属研究室の教員から適切な助言が行われましたか。	3.74	強く思う	そう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	全くそう思わない
			63	127	69	21	9
			21.8%	43.9%	23.9%	7.3%	3.1%
3	研究を実施していく中で、所属研究室の教員から適切な助言が行われましたか。	3.85	強く思う	そう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	全くそう思わない
			69	137	58	16	7
			24.0%	47.7%	20.2%	5.6%	2.4%
4	学内で自らの研究を行うスペースを確保できていますか。	3.63	強く思う	そう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	全くそう思わない
			66	113	59	35	15
			22.9%	39.2%	20.5%	12.2%	5.2%
5	その他の研究環境・設備は整っていますか。	3.49	強く思う	そう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	全くそう思わない
			57	109	56	46	18
			19.9%	38.1%	19.6%	16.1%	6.3%

出典：平成 21 年度 学生による授業評価結果概要から抜粋

資料 2-1-1 美術学部（美術研究科を含む）における教員相互評価結果（デザイン科から一部抜粋）

1 実施の方法について

平成21年11月10日、デザイン科運営委員長、教務委員長、合教担当、デザイン科教務委員の4名で座談会という形をもって、修士1年対象のカリキュラム「デザインプロジェクト」の中間検討会、最終講評会における各先生がたの指導状況について記録を元に評定意見交換が交わされその内容を後日各教員に周知した。

2 デザインプロジェクトについて

(1)デザインプロジェクト

ほぼ前期全体を使い、大学外組織と手を組み、修士1年全員参加でデザイン提案を行うものであり、教授陣全員指導で行っているものである。

(2)カリキュラム内容

異なる専門分野を持った修士生がチーム(5～6人)となり、東京都交通局(都営地下鉄・バス、都電荒川線等)周辺に存在する諸問題を様々な観点から検証し、具体的なデザインの施策をもってどのような解答、解決策が見いだせるかを研究・実施し、最終的に道路交通局へのプレゼンテーションを行うまでをひとくくりとする。

(3)カリキュラム期間日程

平成21年4月15日～7月15日、6月24日中開発表会[デザイン科ゼミ室]、7月15日講評会採点[デザイン科ゼミ室]、10月16日学外プレゼン及び展示会[東京都庁、新宿駅構内]

3 座談会について

(1)日時場所：平成21年11月10日(火) デザイン科会議室

(2)参加者：██████教授(デザイン科運営委員長)、██████准教授(教務委員長)、██████教授(合教担当)、██████准教授(教務委員)、██████助教、██████教育研究助手

4 教員相互評価の結果

(A先生に対する評価)

電鉄関係に深く精通している立場から、経済的に成り立つかどうか、また安全性は確保できているかどうかなど、多くの実例を引き出しながらよりプラグマチックな発言が見られ、これらはより社会性を意識した指導として評価できる。また、新しい提案をする時、ただちに完成されたプロダクトを想起するのではなく、良い「問い」を創出し、それに対して相応しいプロセスを組み立てて解答を導き出す必要があるという指摘、また、提案されたものは組織(東京都交通局)外部への訴求に限らずに、まず組織内部へ訴求できる内容へ軌道修正をすべきだという指導は、これらプロジェクトの実効果を的確に突いた指摘であり評価できる。ただ、制作途中で比較的高い水準のチームの作品に対しては、ことさらに賞賛し、そのチームが本当に正しいディレクションが出来ているのかどうか、自力で検証するチャンスを逸した感もいめない。

(B先生に対する評価)

「作品に対する安全性の指摘」「デザインされたものに実際に接する人の行動(反応)を意識する必要性」「現場ロケーションへの意識・配慮」など、より現場を視野に入れた指導は、社会性を意識した修士の本カリキュラムに相応しい発言だった。また「尊敬される典型的な職員」を冊子化したチームに対し「その本は社員マニュアルとしての機能を持たせた方がうまく社会配置できるのではないか」などの、広告の専門家らしい指摘は次のステップにつながる突破口となりの確かな発言であった。全般に、造形を支える周辺の事情に正しく向き合う姿勢を推す指導傾向は今日のデザイン思考に符号し評価できる一方で、方向性をうまく導き出せないチームに対しては、具体的な形を作りながらプロセスを経るような指導がもっとあって良かったのではないと思われる。また論旨をすり替えがちなチームに対しても、どの時点で話がすり替わったのかその時点で指摘があっても良かった。

(C先生に対する評価)

地下通路を楽しく歩けるよう3D画像を利用したデザインの施策を計画したチームに対し、モチーフになっている「動物」を単に表現するのではなく、歩行者の時間軸を視野に入れ物語性を持たせてモチーフを膨らませ応用するアイデアはないのか、というような指摘、またはそれぞれのチームが向き合っている個々の環境を意識して場の特性を十分に引き出すよう具体的な指摘等、各々のチームが持っている固有の問題に即した細やかな指導が見られこれらは評価できるものである。地下に通じる階段の上り下りを登山に見立ててテクノロジーを持って健康維持に役立てようと計画したチームに対しては、固有性を指摘しつつも、単なる達成感を鼓舞するに留まらず、階段を踏みしめるたびに発電されるようなシステムを構築するなど、エネルギーを還流させるようなアプローチに対しても一度は視野に入れるような指導など、学生の自由な発想をさらにもう一段階ハイレベルな方向に牽引するような発言があっても良かった。

(D先生に対する評価)

健康を意識して制作したチームに対して、単なる弱者救出ではなくユニバーサルデザインに対する高度な解釈に基づく指摘が見られ、通俗的な平等やエコとは一線を画した内容の指導があり修士教育に相応しい高次元の内容として評価できる。また地下鉄車内で今どこを走っているのか地上の画像を社内の額面で放映する計画を立てたチームに対し、国会議事堂などランドマークになるような建造物がない場合の映像は鑑賞に耐えるか等鋭い指摘があるなど、現実の社会配置を想像したうえで発生し得る問題点を指摘した事は、デザインという営みがリアルに社会に結びつくうえでクリエイティブサイドが自ら想像を巡らせてチェック機能を持つ事の重要性を示唆するものであり評価できる。ただ一方、規制を一旦視野からはずしてまったく自由に発想する事によって生まれてくる学生らしい伸びやかなアイデア、またはそれが生まれるプロセスを十分推奨できたかは今後の課題と言える。

(E先生に対する評価)

各チームとも制作したものが造形的に十分な完成度があるかどうかを指摘した事について、東京藝術大学が「造形サイド」からデザインを標榜している立場をとっている点を再認識するものであり評価できる。ここで目指すべき「美」はまた、細やかな実地踏査によるデータが基礎になるべきであり、そこから文脈を引き出すよう指示があった事は東京藝術大学とそこに在る人間の独自性に合致した指導であり適切であった。また東京交通局の広報初めとする複数のスタッフ、著作権等の専門家である弁理士の講師らに授業中、積極的に繰り返し意見を求めるなど、意見がこもらないような配慮と同時に開かれた大学を意識させるシーンもあり評価できる。ただ普遍的な造形理念を元にした指導が多く、必ずしも最新のテクノロジーやロジック、ニーズを十分に意識した発言であったとは認められない。

出典：「平成21年度 美術学部（美術研究科を含む）における教員相互評価報告書」から抜粋